

10月5日 第1回所長講話「求められている21世紀型能力」

所内研修の中の「所長講話」は、2ヶ月に1回のペースで実施します。

第1回目は10月5日(月)に「求められている21世紀型能力」という講話で、グローバル化、資源の有限化、少子高齢化の課題をもつ社会の変化の中で、その解決策は、知識基盤社会の進展、コミュニティを基盤とする社会への転換、情報通信技術(ICT)の高度化と利活用であると話されました。その為に、求められる人材は、他者との関わりを持てるコミュニケーション能力、情報を的確に入手し、分析、統合し、新しいアイデアを生み出す資質・能力を備え、知識を使ってクリエイティブに対応できる能力と他者と協力したり、競争したり、繋がることの出来る能力が備わっていることが必要になっています。その人材を育てるために、「21世紀型の能力」を念頭に置きながら、学んだ知識を実生活や実社会で「どう使うのか」という視点を持ち、「何を知っているか」から「何ができるか」、へと教育の重点を移し、教育の内容、方法、評価の改善をする必要があります。それが、教育研究員皆さんの研究のテーマとも大きく関わってくることで、熱くお話ししていただきました。

【所長講話の主な内容】

1 社会の変化

(1) 社会の変化と求められる人材像

課題・・・グローバル化、資源の有限化、少子高齢化
解決策・・・知識基盤社会の進展
コミュニティを基盤とする社会への転換
情報通信技術(ICT)の高度化と利活用

(2) 日本の強みと新しい社会の姿

(3) 日本の近年の教育政策と社会の変化

○教育は経済・社会に左右されない固有の普遍的な理念
○理念の具現化においては、社会の**変化**と無関係ではない。

(4) 教育課程編成への示唆

2 「21世紀型能力」

(1) 教育課程の編成原理と「21世紀型能力」

(2) 基礎力…言語、数、情報(ICT)を目的に応じて道具として使いこなすスキル

(3) 思考力…「教育課程編成への示唆」で求められている力

(4) 実践力…思考力の使い方を方向付け、実生活で活用する能力

3 「21世紀型能力」と日本の教育課程

(1) 学力の3要素

知識・・・「基本的な知識及び能力」
能力・・・「課題解決の思考力・判断力・表現力」
態度・・・「主体的に学習に取り組む態度」

○「何を知っているか」から「何ができるか」へ教育の重点を移す



写真1 所長講話



写真2 真剣に聞き入る教育研究員

【教育研究員の感想】(研修日誌から)

時代の変化にともなった社会の変化を変えることはできません。その変化の中でも変わらないものは何か？それは、教育することです。小学校からは教科が入り、時代に伴って指導方法や教材を変えていけば何かしらの対応はできると思われれます。幼稚園は“生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの”とあるように、人間性を育てる場であります。私たち教師は、今も昔も変わらない教育を一番身近にできる役割だと感じました。そこで、私の研究テーマである「人とかかわる」ことが多いに関係してくるのだと思いました。遊びを通して、友達と試行錯誤したり、思いや考えを伝えあったり、挫折等を繰り返して経験していくことができるように、どのような環境構成や援助が必要なのか、研究の必要性を改めて感じました。所長がおっしゃっていた「教育はすぐに力がつき実るものではない」という言葉がとても心に残りました。教師がもっている最大限の力を子ども達に還元できるように研究に力をいれていかなければと思います。

(上原亜矢)

所長講話では、変化する社会の中で、子どもたちにどういった力を付けさせればいいのかを教えてくださいました。「求められている21世紀型能力」とは、「教わったことの再現ではなく、自分が知っている知識を使ってクリエイティブにいろいろな状況に対応する能力」であり、社会的技能「他の人と協力したり、競争したり、つながったりする能力」であること。私たち教師の役割は、この21世紀型能力をどう育てるかをしっかりと考え、それを実行することであると分かりました。上原雅志所長の「ある一部をみて否定してはいけない。全体を見て判断しなければならない。」という所長の言葉が胸に響きました。また、20年後には今ある仕事の3分の1しか残らないとの話から、子どもたちの未来がどうなっていくのかをしっかりと見据え、今後の教育に携わっていきたいと思いました。

今回の研修で、上原所長が丁寧に読み進め、皆で一つ一つの意味について意見を出し合い、深く考えたことがとても勉強になりました。
(比嘉頼子)

「求められている21世紀型能力」というテーマでの講話でしたが、一番印象に残っている言葉が、これから重要視される技能として「新しいアイデアを生み出す力」、「既存のやり方を疑う気持ち」、「アイデアや意見を主張すること」でした。確かに、現代は情報化社会になり、わからなくなればすぐ調べることができます。計算機があればすぐ計算の答えもでてきます。誰がでも調べたり答えが出せるものはこれからどんどん不必要になっていき、自分で考え、アイデアを見つけていく能力のある人とない人の格差が大きくなっていくと感じました。例えば、ガソリンスタンドでもセルフ式が多くなってきていることはその代表でしょう。ただし、新しいアイデアを出すことも必要ですが、その基礎となる知識技能も、学校でしっかり身につけさせなければいけないと思いました。ただ、疑問に感じたことが、アンドレアスさんの講演の中でこれからの社会で求められるとおっしゃっていた「他の人との協力」、「競争力」、「つながる能力」です。今まででも日本の教育で、これらは重要な要素だったのではないかと思います。

また、社会的背景と学習成果の関係については、日本は格差の少ない方だと述べられていましたが、現場の教員としては、やはり格差はあると実感しています。親の虐待、育児放棄などそれでもよしと考える親の認識を変えていかなくてはいけないと思いました。その難しさも今、感じています。「不易と流行」という教育においていつの時代も変わらないもの、時代と共に変化せざるをえないものを敏感に感じとりながら教員という職業に携わっていかなくてはならないと思いました。
(久高友弥)

21世紀を生き抜くためには、インターネットで何でも情報を大量に得られる社会の中で、自分が知っていることだけではなく、知っていることで何ができるかが求められ、他者とかかわりながら情報を的確に入手し、分析、統合し新しいアイデアを生み出すことの必要性であり、つまり、「基礎力」「思考力」を基盤とした「実践力」が求められているということを知ることができました。

上原所長が講話の中でおっしゃっておられた「不易と流行」は、社会の変化に対応していかなければならない教育現場にとってとても重要なことだと感じた。私は教師として、社会を担う子ども達にどのような力をつけなければならないのかを常に念頭に入れ、子ども一人一人の自主性や他者とのつながりを大切にしながら「実践力」の育成に努めていきたいと思えます。
(富名腰由紀)

教育現場で、生徒とのジェネレーションギャップを感じる人が多いと感じていました。私も年をとったのかなと思っていましたが、上原所長の講話から社会の動きがグローバル化、少子高齢化といった背景はすごく影響していることがわかりました。「完成教育」から「生涯学習」へ移行し学び続ける意義をしっかりともてる教育が求められていると感じました。

求められる21世紀型能力として、私は自ら考え、創造する力だと感じました。グーグルなどで調べたらなんでもわかる世の中で学校教育でしかできないのも（セールスポイント）を私たち教師も創造する力が求められていると感じました。

自分の中の「気になる」「おもしろそう」「どうしてだろ」といった感覚を大切に問題を見つける力を見逃さないようにしていき、研究テーマにオリジナルの視点がある研究にしていきたいです。

(波照間生子)